

ピロリ菌について No7

ピロリ菌除菌後の生活で気をつけること

① 除菌後の胃がん

除菌に成功しても胃がんのリスクは残存しているため、特に胃体部萎縮の強い症例（胃潰瘍、早期胃がん、胃腺腫のEMR後胃）は除菌後の胃がん発生に注意して年に1回の定期的な胃カメラ（内視鏡）検査を行う必要があります。

② 除菌後の潰瘍再発

除菌により胃・十二指腸潰瘍の再発率は抑制されますが、時に潰瘍再発をきたす症例、特に非ステロイド抗炎症薬の服用がそのリスクとなる場合があります。除菌後も自覚症状に注意して胃カメラ（内視鏡）検査を行う必要があります。

③ 除菌後の逆流性食道炎発生

除菌後には、ピロリ菌の感染によって胃酸分泌が抑えられていたのが回復し、人によっては胃酸により胸やけを感じる場合があります。多くは一時的なものですが、症状が辛い場合や長引く場合は医師に相談してください。

④ 再陽性化

頻度は低いものの、除菌後の「再陽性化」についても留意する必要があります。除菌成功後に再びピロリ菌が出現する要因として、ピロリ菌の「再燃」と「再感染」があります。再陽性化には、「除菌判定時陰性」＝「再燃」と、「新たな菌が新規に感染する」＝「再感染」があります。

⑤ 食生活や体重コントロール

除菌した人の中には、胃の調子がよくなって、過食から肥満に至るケースがあります。生活習慣病の予防のためにも、バランスのよい食事を適量摂るように心がけましょう。

話題の新薬 パーサビブ静注透析用

カルシウム受容体作動剤

小野薬品は、カルシウム受容体作動剤「パーサビブ静注透析用」を新発売した。本剤は、副甲状腺細胞表面のCa受容体にアロステリックに作用し、受容体のCa感受性を高めることで、主にPTH分泌を抑制し、血中PTH濃度を低下させる。二次性副甲状腺機能亢進症の治療では、血清PTHおよび血清Ca、リンの管理を目的に、Ca受容体作動剤のシナカルセトや活性型ビタミンD製剤が投与されるが、すべての管理目標値を達成している患者さんは3割程度にとどまるとの報告もある。本剤は、血液透析終了時に透析回路より投与する注射剤であり、医師の管理下において確実な投与が可能となる。

薬価 2.5mg＝873円 5mg＝1283円
10mg＝1885円

副作用情報 テネリア錠

田辺三菱製薬から販売されている糖尿病用剤の「テネリア錠20mg」は、直近3年5ヶ月の副作用報告であって、因果関係が否定できない副作用として、「類天疱瘡関連症例」が7例（うち死亡0例）報告された。そのため重大な副作用の項に「類天疱」が追記された。

子供の3割超が花粉症

ロート製薬は、約2900人の子どもについて花粉症の有無を親に聞いたところ、「花粉症だと思う」との回答が31.5%に上ったという調査結果をまとめた。食物アレルギーも起こりやすいとして、対策を呼び掛けている。特定の果物や野菜を食べたときに出ることがある「口腔（こうくう）アレルギー症候群」は、花粉症との関連性が指摘されている。リンゴやモモ、キウイを食べ、口や唇、喉にかゆみを感じたという子どもが目立った。ロートは「子どもの症状は気付きにくいので見逃さないことが大事だ」と説明し、屋外ではマスクを着用させるなど、親による対策が重要だとしている。